幼児期の自己制御機能の発達 (3)

—父親と母親の態度パターンが幼児にどのような影響を与えるか—

A developmental study of self-regulation in preschool children (3)
— Effects of parental attitude patterns on their children —

森　下　正　康
MORISHITA　Masayasu
（和歌山大学教育学部）

要　約

今日のいじめや不登校，学級崩壊などの問題行動の背景に，自己制御機能の発達や思いやり，攻撃性の問題が関与していると考えられる。これまで子どもに対する母親の影響について検討してきた。今回は，主として父親の態度がどのような影響を与えるか，さらに父親の態度と母親の態度の組合せパターンが子どもの自己制御機能等の発達にどのような影響を与えるかを検討した。和歌山県下の市部と郡部の計５つの幼稚園と保育園から３，４，５歳児を対象に，担任教師と母親，父親に評定を求めた。子どもについては，自己抑制，自己主張，思いやり，攻撃性の４特性に関して担任教師に評定を求め，養育態度については，受容，統制，矛盾，実権について，母親父親それぞれに自己評定を求めた。すべてのデータがそろった489名について分析した。

主要な結果は次の通りであった。(1) 男子について，母親が愛情豊かな場合あるいは父親が愛情豊かで統制がゆるやかな場合，思いやりが形成される。女子について，愛情豊かで統制がゆるやかな父親の場合は自己抑制が発達する。それに対して，冷たくて厳しい母親の場合は女子の自己抑制が育たず攻撃性が高くなる。また，冷たくて厳しい父親の場合は女子の思いやりが育たず攻撃性が高くなる可能性がある。(2) 母父の態度の組合せパターンについてまとめると次のようになる。両親の暖かい受容的な態度は女子の自己抑制の発達にとって重要である。それに対して，両親の冷たく拒否的な態度は子どもの攻撃性を高める。(3) 両親共に統制がゆるやかな場合，女子の自己抑制の発達にプラスの影響を与えるが，男子の自己主張の発達にマイナスの影響を与える。また，母親だけが厳しく統制的な場合は子どもに高い攻撃性を形成させる。(4) 両親共に矛盾しない一貫した態度をもっている場合は，男子の自己抑制や自己主張の発達にプラスの影響を与える。(5) 自己主張は，男子の場合は父親が，女子の場合は母親が子育ての実権を持っている方が発達する。両親が実権を持っている場合には，男子の自己制御や思いやりの発達に対してマイナスの影響を与える可能性がある。

キーワード：自己制御・思いやり・攻撃性・母親の態度・父親の態度・幼児期

1．研究目的

今日社会問題となっているいじめや不登校，学級崩壊，キレルなどの問題行動の背景に，自己制御（自己抑制と自己主張）機能の発達や思いやり，攻撃性の問題が関与していると考えられる。

そこで，子どもの自己制御機能の発達に対して親の養育態度がどのような影響を与えるかについて，これまで母親の影響について検討してきた（森下，2000a,2000b)。

幼稚園での子どもの自己制御の発達に対して，母親の態度はどのような影響を与えるかについての研究（森下，2000b）の結果，次の点が明らかとなった。年中児の場合，母親の受容的態度が男子の自己主張を育て，母親の誘導スタイルが女子の自己抑制と自己主張の両方を育てる可能性があった。それに対して，年長児の場合，母親の統制的態度や力中心スタイルが男子の自己抑制機能の発達を阻害する。また，女子に対しては，母親の力中心スタイルが自己主張機能を高め，さらに，母親の統制的態度が自己主張だけが高く自己抑制の低い子どもを育てる可能性があった。以上の結果は，先の家庭での子どもの自己制御の発達に対して，母親の態度はどのような影響を与えるかに関する研究（森下，2000a）の結果とは多少異なっていた。

すでに指摘してきたように，子どもの発達にとって父親の影響は重要である。つまり，家庭のなかでの子どもに対する母親と父親の役割や機能が，子どもの自己制御機能の発達にどのような影響を与えているかを明らかにすることが，残された重要な課題であった。したがって，今回は主として父親の態度が子どもにどのような影響を与えるか，さらに父親の態度と母親の態度の組合せパターンが園での子どもの自己制御機能の発達や，思いやり，攻撃性の形成にどのような影響を与えるかを検討したい。

ここでは，担任，父親，母親のデータの組合わせを問題にする必要があるので，多量のデータを必要とする。そこで研究対象となる園の数を増やし，できるだけ多様な地域の子どもたちが対象となるように配慮した。したがって，すでに分析してきたことではあるが，広範なデータを用いて，自己抑制，自己主張，思いやり，攻撃性が年齢と共にどのように変化するのか，さらに自己制御の発達が思いやり，攻撃性と相互にどのように関連するかについても分析したいと考える。また，父親と母親のそれぞれについて，養育態度の重要な次元である受容と統制の次元に関して，その組合せパターンと子どもの特徴との関連を探る。

2．研究方法

1．調査対象と手続き

和歌山県下の４つの幼稚園（岩出町・有田市・湯浅町・田辺市）と１つの保育園（和歌山市），計759名の幼児が研究の対象となった。一人ひとりの子どもについて，各園児の担任に対して園でのようすをもとに自己抑制，自己主張，思いやり，攻撃性について評定を求めた。また，同時にその子どもの母親と父親に対して，家庭での子どものようすについて評定を求め，さらに子どもに対する自分の養育態度について，自己評定を求めた。その結果，担任教師・母親・父親のすべてのデータがそろったのは489組であった。その内訳を表１に示す。

調査時期：2000年　７－８月。

表１　分析の対象者数

	男児	女児	計
年少児	93	90	183
年中児	83	90	173
年長児	63	70	133
計	239	250	489

2．用いられた尺度

子どもの特性について，自己抑制・自己主張・攻撃性についてはこれまでの研究と同じ項目を用いた。思いやりに関しては小嶋ほか（1988）の養護性研究と森下（1985）の研究をもとに作成した。担任による評定には，前回（森下，2000a，2000b）よりきめの細かい評定を求めて，自己抑制と自己主張に関しては4件法（3非常にそうだ・2かなりそうだ・1ややそうだ・0ちがう），思いやりと攻撃性に関しては5件法（4非常によくある・3よくある・2ときどきある・1たまにある・0ない）に変更した。その質問紙を表2，表3に示す。親に対しては従来通りのものを用いた。

親の養育態度については，小嶋ほか（1988）の作成した受容尺度（10項目），統制尺度（10項目），実権尺度の一部（5項目）と，鈴木ほか（1985）の作成した矛盾尺度の一部（5項目）を用いた。

尺度の内容は次の通りであった。

【子どもの特性】

(1)　自己抑制：この特性には，「つらくても我慢する」「今すぐでなくても待つことができる」「やりだしたら最後までがんばる」という三つの特徴が含まれている。得点が高いほど，欲求不満に耐える力・待つ力・根気が強いことを示す。

(2)　自己主張：ここでの自己主張は，よい意味での自己主張で自己表現力といいかえてもいいものである。その中には，大きく二つの特徴がふくまれおり，ひとつは正しいと思うことは人の前で話すことができ，いやだと思うことは拒否できるという「正当な主張・拒否」という特徴であり，もう一つは，自らすすんでものごとに取り組む「積極性・自主性」という特徴である。得点が高いほど，これらの特徴が強いといえる。

この自己主張と自己抑制の両方をあわせて自己制御とよび，この二つがバランスよく発達することが自己制御機能の発達にとって望ましいと考えられる。

(3)　思いやり：動物や植物を育てたり，自分より小さいもの，弱いものの世話をしたり面倒をみたりする特徴で養護性（nurturance）といえるものである。得点が高いほど，優しさや思いやりが育っていると考えられる。

(4)　攻撃性：活動的で行動が荒々しく，乱暴で，他の子を傷つけたりする傾向である。あまりに得点が高すぎるのは問題だと考えられる。

【親の養育態度】

(1)　受容：子どものことが好きで，子どもの気持ちや行動をよく理解し，優しく受け入れるという特徴である。得点が高いほど，優しさや愛情の豊かさを示しており，得点が低いほど拒否的で冷たい態度を示す。

(2)　統制：親自身の気持ちや，欲求を強く子どもに押しつける特徴である。この得点が高いほど，なんでも自分の思うようにやらせようとして，子どもに口やかましく指図したり，叱ったりする傾向が強いことを示す。

(3)　矛盾：親の態度が，時と場合によってころころと変わる程度を示している。得点が高いほど，子どもに対するしつけや態度に一貫性がなく，矛盾が多いといえる。

(4)　実権　子どものしつけや教育に対して，より実権を持っているのは父母どちらかを測定している。得点が高いほど，評定者自身の方が実権を持っていると認知していることを示す。

表2　子どもの自己抑制と自己主張を測定するための質問紙（担任用）

お願い

担任用

「ふだんの子どもさんの様子について、ありのままにつけてください」

クラス（年長・年中・年少）　　組　　番

子どもの名前　　（男・女）（　　歳　　ヶ月）

当てはまるところ（数字）に○をしてください。

	非常にそうだ	かなりそうだ	ややそうだ	ちがう
1．先生や友だちの話をおわりまで、しっかり聞く。	3	2	1	0
2．いやなことは、はっきり「いや」という。	3	2	1	0
3．してほしいこと、欲しいものをはっきり大人にたのむ。	3	2	1	0
4．あそんでいるとき、きちんとルールを守れる。	3	2	1	0
5．ちょっと、失敗したりうまくいかないと、すぐにあきらめる。	3	2	1	0
6．ほかの人と意見がちがっていても、自分の意見をいう。	3	2	1	0
7．友だちにいじわるされたり、いやなことをいわれたとき「やめて」という。	3	2	1	0
8．あそんでいるとき、ずるいことをした子に「だめ」という。	3	2	1	0
9．「してはいけない」といわれたことは、しない。	3	2	1	0
10．あそびのとき、自分の順番がくるまで待てる。	3	2	1	0
11．ひどいわる口をいわれたり、からかわれたとき怒る。	3	2	1	0
12．自分の思ったことを、みんなのまえでなかなか口に出していえない。	3	2	1	0
13．けがをしたり、すこしぐらい血がでたりしても泣かない。	3	2	1	0
14．人のものをかってにさわったり、使ったりしない。	3	2	1	0
15．自分の席に座っている子にのいてほしいとき、「のいて」という。	3	2	1	0
16．自分の使いたいあそび道具を、かわりばんこに使える。	3	2	1	0
17．自分の番に、だれかがわりこんできたとき「順番をぬかさないで」という。	3	2	1	0
18．時間がかかっても、最後までがんばる。	3	2	1	0
19．すすんで手をあげて、発表する。	3	2	1	0
20．人が話しているとき、退屈するとよそ見をしたり手あそびをする。	3	2	1	0
21．ほしいものがすぐ手に入らなくても、がまんできる。	3	2	1	0
22．はいりたいあそびに、自分から「いれて」という。	3	2	1	0
23．やりたくないことでも、やらないといけないときはやる。	3	2	1	0
24．自分のものをとられたとき「かえして」という。	3	2	1	0
25．おもしろくなくても、おわりまでだまって人の話を聞く。	3	2	1	0
26．「あとにしなさい」といわれれば、待てる。	3	2	1	0
27．いやなことをいわれたりされたりしたとき、泣いたり黙ってしまったりする。	3	2	1	0
28．むずかしいことでも、あきらめずにやる。	3	2	1	0
29．人に聞かれたら、はきはきこたえる。	3	2	1	0

表3　子どもの思いやりと攻撃性を測定するための質問紙（担任用）

当てはまるところに○をしてください。

0：	ぜんぜんない	ぜんぜんない
1：	たまにある　（1ヶ月に1回以下）	たまにある
2：	ときどきある（1ヶ月に何回か）	ときどきある
3：	よくある　　（1週間に何回か）	よくある
4：	非常によくある（ほぼ毎日のように）	非常によくある

	（例）朝起きたら、すぐに顔を洗う ……	4	③	2	1	0
1	友だちの世話をする ……	4	3	2	1	0
2	生き物をかわいがる ……	4	3	2	1	0
3	友だちとけんかをする ……	4	3	2	1	0
4	言葉づかいがあらい ……	4	3	2	1	0
5	いうことをきかない ……	4	3	2	1	0
6	友だちが困っていたら助ける ……	4	3	2	1	0
7	友だちが悲しんでいたりするとき、なぐさめる ……	4	3	2	1	0
8	年下の子の面倒をみる ……	4	3	2	1	0
9	すぐ暴力をふるう ……	4	3	2	1	0
10	友だちをつねったり叩いたりする ……	4	3	2	1	0
11	植物の世話をする ……	4	3	2	1	0
12	物を乱暴にあつかう ……	4	3	2	1	0
13	友だちを励ましたり応援したりする ……	4	3	2	1	0
14	気に入らないことがあると暴れる ……	4	3	2	1	0
15	自分の使っているオモチャを他の子にかしてあげる ……	4	3	2	1	0
16	自分より小さい子どもをいじめる ……	4	3	2	1	0

（つけ落としがないかどうか、見直してください）

3．研究結果

1．自己制御，思いやり，攻撃性尺度の信頼性

自己制御に関する項目について，担任，母親，父親別に因子分析した結果，同じような因子構造であることが明らかとなった。担任による評定（対象児731）の分析結果をみると，自己制御は自己抑制と自己主張の二つの因子からなっていた。その因子に負荷の高かった項目番号は表4の通りである。この結果は，従来の研究結果とほぼ一致している。ただし，自己抑制，自己主張尺度の項目数は，それぞれ1項目ずつ少なくなっている。各尺度のアルファ係数を求めた結果，自己抑制尺度は0.940，自己主張尺度は 0.947と高い値であった。また，担任の評定した思いやりと攻撃性の計１６項目について，同じように因子分析した結果，それぞれに対応した因子が得られた。その項目番号を表4に示す。思いやりと攻撃性のアルファ係数はそれぞれ0.859，0.897であった。いずれの尺度も信頼性が高いものと判断される。

表４　自己抑制と自己主張の項目

自己抑制（14項目）	：	1•4•5*•9•10•14•16•18•20*•21•23•25•26•28
自己主張（13項目）	：	2•3•6•7•8•11•12*•15•17•19•22•24•29　　（注）＊　逆転項目
思いやり（８項目）	：	1•2•6•7•8•11•13•15
攻撃性　（８項目）	：	3•4•5•9•10•12•14•16

2．自己抑制，自己主張，思いやり，攻撃性の年齢による変化

幼稚園での担任評定について，それぞれの尺度得点が子どもの年齢の上昇と共にどのように変化するかについて男女別に分散分析を行った。得点の平均値を図１，２，３，４に示す。

自己抑制の得点は，男女共に年齢間に有意差があった（$F(2,236)=8.973, p<0.001$；$F(2,247)=7.629$，$p<0.001$）。そこで，さらにTukeyの法によって年齢間の比較を行った。年少から年中にかけては変化が少なく，年中から年長にかけて得点が有意に上昇していた。また，女子の方

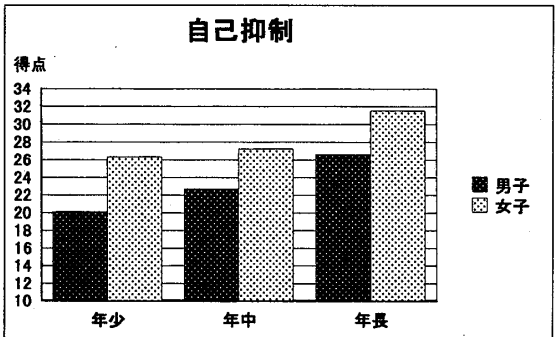

図1　自己抑制の発達

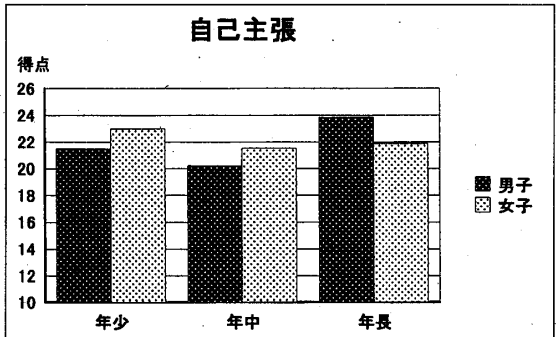

図2　自己主張の発達

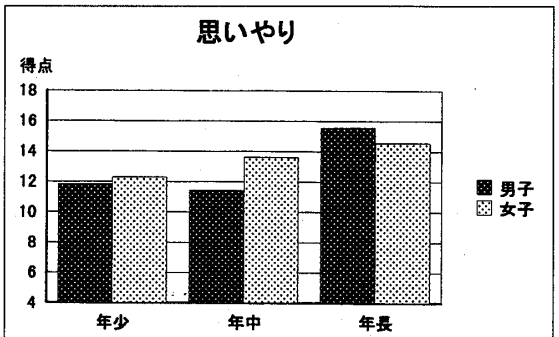

図3　思いやりの発達

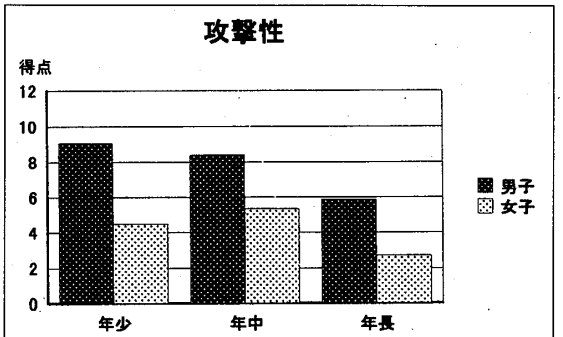

図4　攻撃性の変容

が男子よりもいずれの年齢においても得点が有意に高かった。

自己主張は，男子では有意差（$F(2,236)=2.950$，$p=0.05$）があったが，女子ではなかった。男子は，年少と年中の間には有意差がなかったが，年中から年長へと得点が有意に上昇していた。性差は有意ではなかった。

思いやりについては，女子には年齢間に明確な有意差はなかったが，男子には有意差があった（$F(2,236)=12.827$，$p<0.001$）。男子では，年少から年中にかけて変化がないが，年中から年長にかけて思いやり得点が有意に上昇していた。性差は年中児でみられ，女子の方が男子よりも思いやり得点が高かった。

攻撃性は，男女共に有意差がみられた（$F(2,236)=4.871$，$p<0.01$；$F(2,247)=7.161$，$p<0.001$）。男子も女子も，年少と年中の間には差がないが，年中から年長にかけて有意に得点が下降していた。性差はすべての年齢で有意で，男子の方が女子よりも攻撃性が高かった。

3．自己制御の発達と思いやり，攻撃性

自己制御のパターンと思いやり，攻撃性との関連を検討するために，まず，自己制御パターンの分類を行った。担任教師の評定によるデータについて，男女別に年少，年中，年長児それぞれの自己抑制の中央値と自己主張の中央値によって，できるだけ上位群（H）と下位群（L）の人数が同じようになるように分け，それを組み合わせて4群を作った。群別の人数を表5に示す。

思いやり得点について，4群の特徴を分析した（図5）。分散分析の結果，男女共に，自己抑制と自己主張それぞれ高い群の方が低い群よりも思いやり得点が有意に高かった。したがって，自己抑制と自己主張が共に高いＨＨ群（自己制御の発達した群）の思いやり得点が一番高く，両方とも低いＬＬ群の思いやり得点が一番低かった。

表５　自己抑制と自己主張の組合せ

	男子		女子	
	主張		主張	
抑制	H	L	H	L
H	58	61	67	61
L	66	54	57	65
計	124	115	124	126

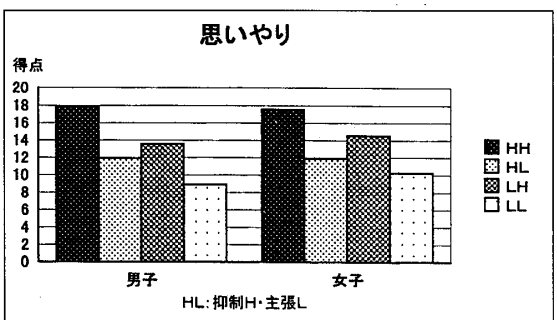

図５　自己抑制と思いやり

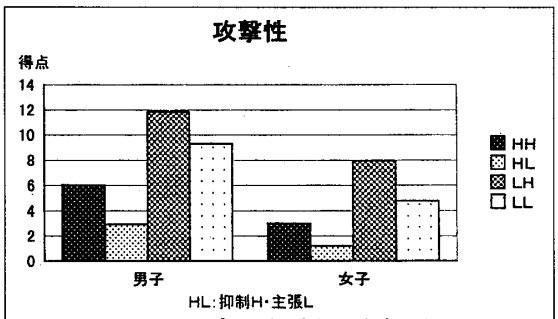

図６　自己抑制と攻撃性

攻撃性について，４群の特徴を図６に示す。男女共に自己抑制は低い群の方が，自己主張は高い群の方が攻撃性得点が高かった。したがって，自己抑制が低く自己主張の高いＬＨ群（自己主張型）の攻撃性が一番高く，ＨＬ群（自己抑制型）の攻撃性が一番低かった。

４．母親と父親の態度パターン

母親と父親それぞれについて，養育態度のパターンが子どもにどのような影響を与えているかについて検討した。養育態度のパターンとしては，従来から受容という次元（因子）と統制という次元（因子）の組合せが重要だと考えられている。そこで，それぞれの次元の中央値をもとに上位群と下位群にわけ，４つの養育態度パターンを構成し，子どもの特徴について比較した。

(1)　母親の態度パターンと子どもの特性

結果を図７から図10に示す。男子について，母親の受容と統制が共に高いＨＨ群（受容的統制型）は自己主張が高かった。また，母親の統制が高い群は低い群に比較して思いやり得点が高かった。女子について，母親の受容が低く統制が強いＬＨ群（統制型）は，特に自己抑制が低かった。それに対して，統制が強い場合は攻撃性が高く，特にＬＨ群（統制型）の攻撃性が高かった。自己主張には差がなかった。

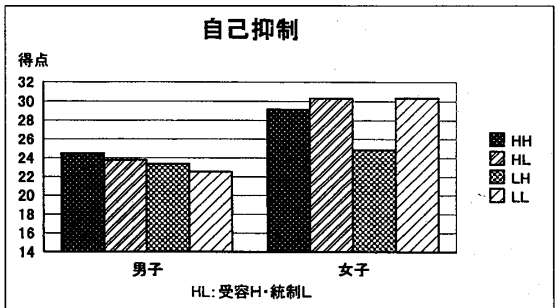

図７　母親の養育態度と自己抑制

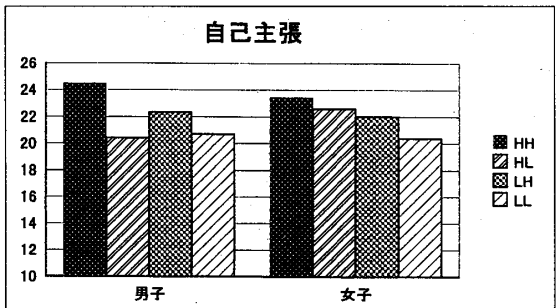

図８　母親の養育態度と自己主張

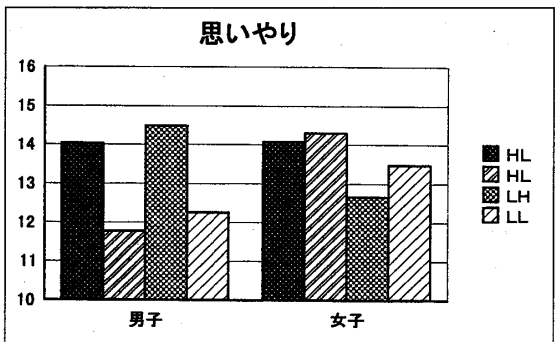

図９　母親の養育態度と思いやり

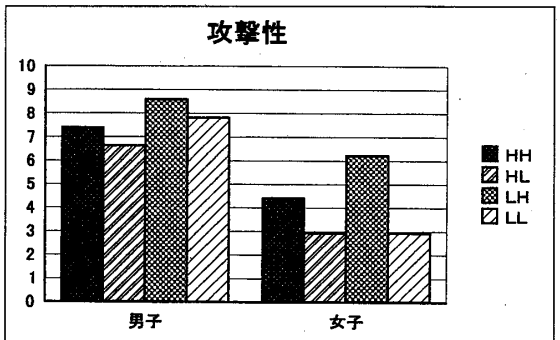

図10　母親の養育態度と攻撃性

(2)　父親の態度パターンと子どもの特性

結果を図11から図14に示す。男子について，父親の受容が高く統制が弱いＨＬ群（受容型）は思いやり得点が高かった（図13)。女子について，父親の受容が高く統制が弱いＨＬ群（受容型）は自己抑制が高く，ＨＨ群は思いやり得点が高かった（図11，13)。その反対に受容が低く統制が強いＬＨ群（統制型）は思いやり得点が低く，攻撃性は高かった（図９，10)。自己主張については男女共に有意差がなかった。

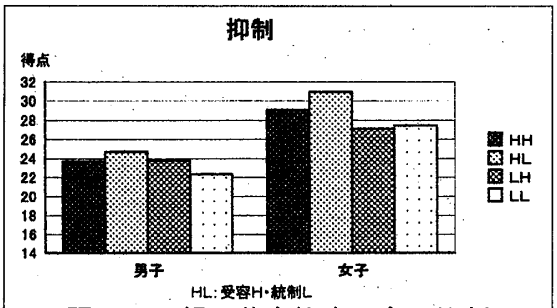

図11　父親の養育態度と自己抑制

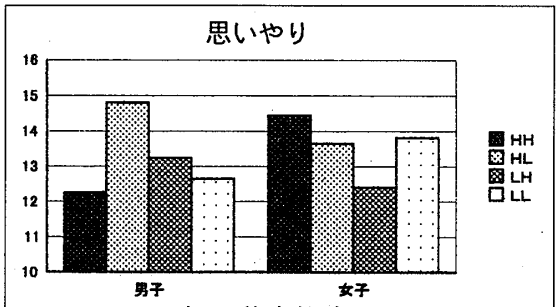

図13　父親の養育態度と思いやり

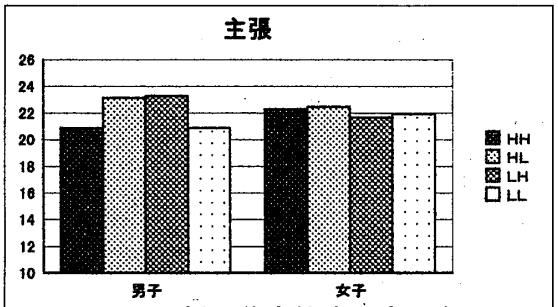

図12　父親の養育態度と自己主張

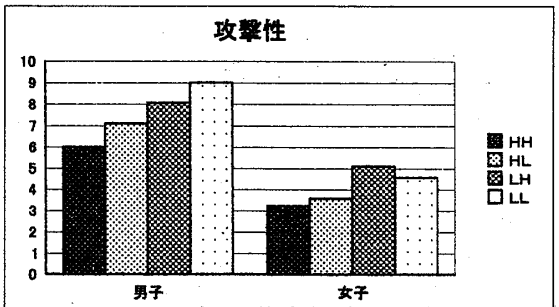

図14　父親の養育態度と攻撃性

５．母親・父親の組合せパターン

母親と父親のかかわりが別々に子どもに影響しているのではなく，トータルで影響していると考えられる。そこで，各養育態度について，母親と父親の態度の組合せと子どもの特性との関連を検討した。各態度について，それぞれ母親と父親の得点の中央値を用いて上位群と下位群に分類し組み合わせた。そのようにしてできた４群の子どもの人数を表６に示す。

表６　母父の養育態度パターンと人数

母父	男子 受容	男子 統制	男子 矛盾	男子 実権	女子 受容	女子 統制	女子 矛盾	女子 実権
ＨＨ	68	71	70	37	65	72	61	43
ＨＬ	54	51	77	76	53	50	75	87
ＬＨ	44	53	45	93	52	58	37	84
ＬＬ	73	64	47	33	80	70	77	36

受容や統制的態度に関しては，男女共に母親と父親の両方の得点が高い群または低い群の人数が多いことが特徴となっている。この二つに関しては，母親と父親が類似した態度パターンを示す傾向があるといえよう。矛盾については，女子ではＬＨ群（父矛盾型）の人数が少ない点が注目される。実権については，男女共にＨＬ群やＬＨ群のように母親と父親のどちらかが実権を持つパターンが多いのが特徴となっている。これは尺度の性質上，当然の結果といえる。

(1)　受容的態度について，各尺度得点について分散分析の結果，有意差のあったものは自己抑制と攻撃性に関してであった（図15，図16）。自己抑制について，母と父の受容が共に高いＨＨ群（母父受容型）の女子は自己抑制が高いのに対して，母父ともに受容が低いＬＬ群（母父拒否型）は自己抑制が低かった。また，攻撃性については，男女共に，母と父の受容が共に高いＨＨ群（母父受容型）は攻撃性が低いのに対して，母父ともに受容が低いＬＬ群（母父拒否型）は攻撃性が高かった。

(2)　統制的態度に関して，すべての特性ついて有意差があった（図17から図20）。男子について，母親の統制が強く父親の統制が弱いＨＬ群（母統制型）は自己主張が高く，両方とも統制が弱いＬＬ群（母父非統制型）は自己主張が弱かった。また，ＨＬ群（母統制型）の男子は攻撃性が高かった。さらに，母親の統制が弱く父親の統制が強いＬＨ群（父統制型）は思いやり得点が低かった。

女子について，母親と父親が共に統制が弱いＬＬ群（母父非統制型）はＨＬ群（母統制型）よりも自己抑制が高かった。また母親の統制が強い場合は女子の攻撃性は高かった。

(3)　矛盾について，男子の場合，両親共に矛盾の少ないＬＬ群（両親一貫型）の自己抑制が高かった（図21）。自己主張については，両親共に矛盾の多いＨＨ群（両親矛盾型）やその反対のＬＬ群の自己主張が高かった（図22）。また，両親共に矛盾の少ないＬＬ群（両親一貫型）の攻撃性は低かった（図22）。女子については有意差はなかった。

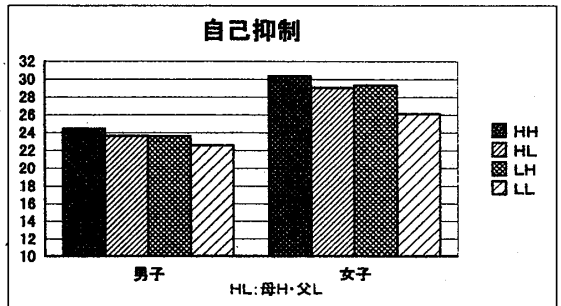

図15　母父の受容と自己抑制

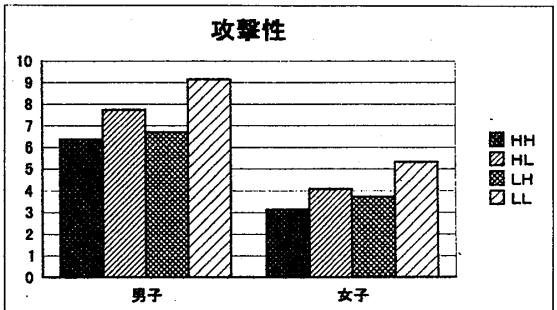

図16　母父の受容と攻撃性

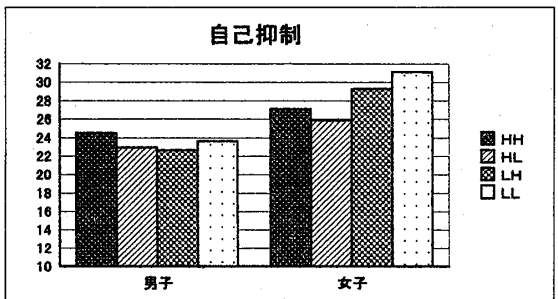

図17　母父の統制と自己抑制

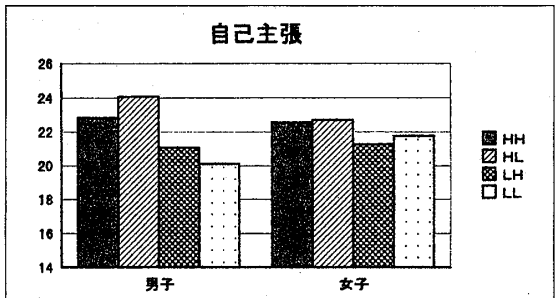

図18　母父の統制と自己主張

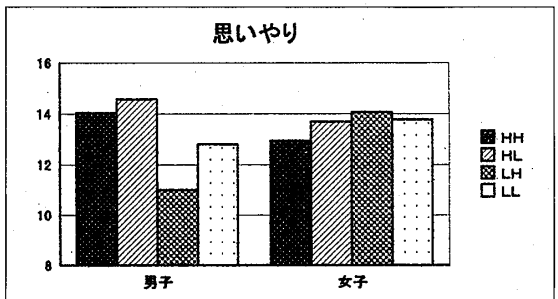

図19　母父の統制と思いやり

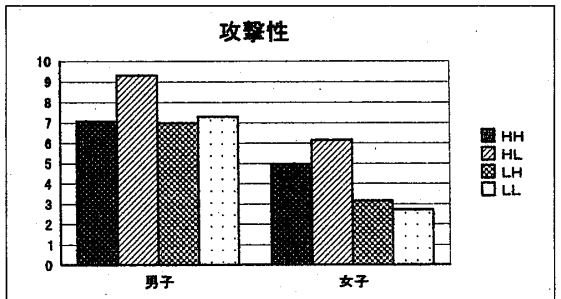

図20　母父の統制と攻撃性

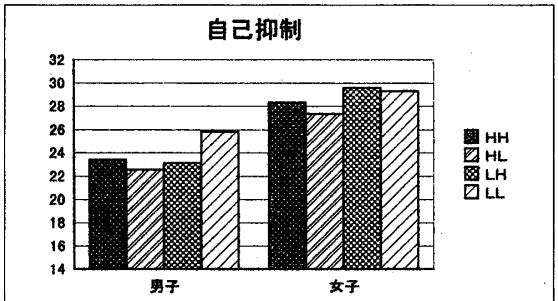

図21　母父の矛盾と自己抑制

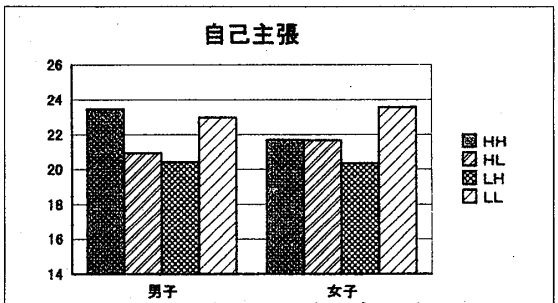

図22　母父の矛盾と自己主張

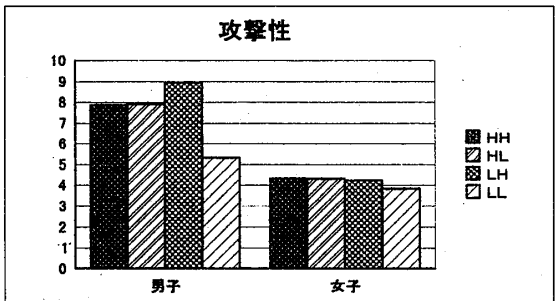

図23　母父の矛盾と攻撃性

(4)　実権（子どもの養育について母父のどちらが実権を持っているかということ）と子どもの特性との間には，次のような関連がみられた（図24から図26）。男子について，両親が実権を持っているＨＨ群は自己抑制が低かった。また，父親が実権を持っているＬＨ群（父実権型）は自己主張も思いやり得点も高く，両方が実権を持っているＨＨ群は自己主張も思いやり得点も低かった。女子について，母親が実権を持っているＨＬ群（母実権型）は自己主張が高く，両親とも実権を持っていないＬＬ群は自己主張が低かった。また，父親が実権を持っているＬＨ群の女子は，思いやり得点が低かった。

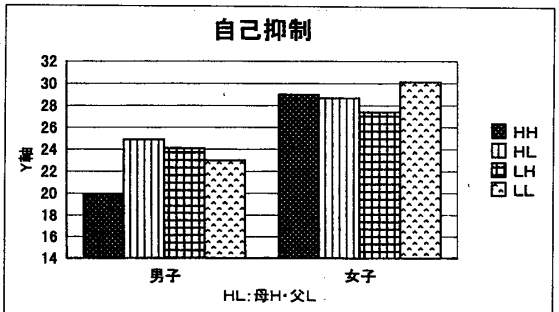

図24　母父の実権と自己抑制

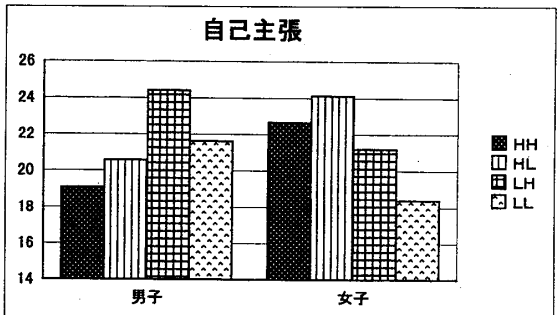

図25　母父の実権と自己主張

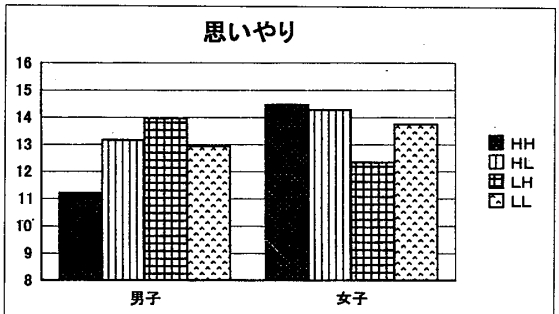

図26　母父の実権と思いやり

4．考　　察

(1)　自己抑制，自己主張，思いやり，攻撃性の年齢による変化

自己抑制について，男女に共通して年少から年中にかけては変化が少なく，年中から年長にかけて発達がみられた。また，女子の方が男子よりもいずれの年齢においても自己抑制が発達していた。この結果は，前回（森下，2000b）の結果とほぼ同じ様相を呈しているが，ただ女子では前回は年少からの年中にかけても自己抑制が上昇していた点が異なる。

自己主張は，女子では有意な変化がみられなかったが，男子では年中から年長へと発達がみられた。性差は有意ではなかった。しかし，前回の研究では男子は有意差がないが，女子では年少から年中にかけて自己主張が上昇していた。また，性差があり，年少児では女子の方が男子より著しく自己主張が低かった。

思いやりについては，女子には有意な変化がなかったが，男子では年中から年長にかけて思いやりが発達していた。また，年中児では女子の方が男子よりも思いやり得点が高かった。それに対して，前回の結果は，女子にも有意差があり，思いやりは年中から年長にかけて上昇していた。さらに，男子では年中児の得点が他より低かった。また，年中児だけでなく，年長児でも女子の方が男子より得点が高かった。

攻撃性は，男子も女子も，年少と年中の間には差がないが，年中から年長にかけて得点が低下していた。性差について，すべての年齢で男子の方が女子よりも攻撃性が高かった。前回の結果も今回と同じように男子の方が女子よりも攻撃性が高かった。しかし，男女共に年少，年中，年長と年齢が進むにつれて攻撃性が低下していた。

以上，前回の結果と今回の結果を比較すると，自己抑制と攻撃性については共通点が多かった。

しかし，自己主張と思いやりについては，一致しない点が多かった。このことは，前回はひとつの園が対象で，今回はその園を含む5園が対象であったという点と，測定した時点が前回は2－3月，今回は7－8月と異なっていたということを反映しているのだろう。詳細にみれば，年齢による子どもの変化は園によって様相が異なっている。この点の確認とそれがどこから生じるかについては，さらなる検討が必要である。

(2) 自己制御と思いやりおよび攻撃性との関連

自己制御機能と思いやりとの関連を探った結果，男女共に自己抑制が高いほど思いやり得点は高く，自己主張が高いほど思いやり得点が高かった。この点は前回の研究結果（森下，2000)とほぼ一致していた。つまり，自己制御機能が発達している群ほど思いやり得点が高いということが明らかとなった。したがって，思いやり行動の根底に自己を抑制する機能や自己を主張（表現）する機能の育ちがあると考えられる。

自己制御機能と攻撃性との間では，自己抑制が攻撃性を低減するのに対して，自己主張は攻撃性を高めるという結果であった。前回の結果は，男女によって，また年齢によって結果は微妙に異なっていたが，今回の結果はそれらを総合したようなかたちの結果となっていた。つまり，自己抑制が低く自己主張が高いという自己主張型の子どもの攻撃性が著しく高いということがわかった。したがって，自己主張機能だけが発達するのは問題である。

以上の結果から，幼児の思いやりの形成や攻撃性という視点から，自己抑制機能も自己主張機能も共に発達することが望ましいということができよう。

(3) 母親と父親の態度パターンと子どもの発達

親の態度と子どもの特徴との間には相互規程的な関係があり，そのような相互作用のなかで子どもは発達すると考えられる。この点をふまえながら，ここでは親から子どもへの影響という視点から結果を解釈する。

自己制御について，母親の統制が高い場合に男子の思いやりが育つが，受容と統制が共に高い場合は自己主張が育つ可能性がある。女子については，母親の受容が低く統制が強い統制型の場合は自己抑制が発達せず，攻撃性が高くなる。したがって，母親の統制は男子に対してプラスの影響を与えるが，その反対に冷たくて厳しい母の態度は女子にマイナスの影響をもたらすと考えられる。

父親の態度パターンについて，受容が高く統制が弱い受容型の場合，男子は思いやりが，女子は自己抑制が発達する。その反対に，受容が低く統制が強い統制型の場合，女子の思いやりが育たず，攻撃性が高くなる可能性がある。

以上，母親と父親の態度パターンについて，次のようにまとめることができる。まず男子について，母親が統制的な場合あるいは父親が愛情豊かで統制がゆるやかな場合，男子に思いやりが形成される。女子について，父親が愛情豊かで統制がゆるやかな場合は自己抑制が発達する。それに対して，冷たくて厳しい母親の場合は女子の自己抑制が育たず攻撃性が高くなる。また，冷たくて厳しい父親の場合は女子の思いやりが育たず攻撃性が高くなる可能性がある。

(4) 母親・父親の態度の組合せパターンと子どもの発達

母親と父親の受容が共に高い場合（母父受容型）は女子の自己抑制が発達し，その反対に受容が共に低い場合（母父拒否型）は女子の自己抑制が発達しない可能性があった。さらに，母父拒否型の場合，男女ともに強い攻撃性が形成される可能性がある。このように，暖かい受容的な父・母・子関係のなかで，女子の自己抑制が育つ。それに対して，冷たい拒否的な父・母・子関係の

なかで男女ともに攻撃性が形成される。このことは，攻撃性は根底においてフラストレーションと関連している（森下，1996）ということと無関係ではないだろう。つまり，母親と父親からの冷たい拒否的な態度は，愛されたいという子どもの根源的欲求をまっこうから否定するものである。

統制的態度次元については，母親の統制が強く父親の統制が弱い場合（母統制型），男子は高い自己主張と高い攻撃性を形成する可能性がある。また，母親も父親も統制が弱い場合（母父非統制型），男子は自己主張が発達しない。さらに，母親の統制が弱く父親の統制が強い場合（父統制型），男子の思いやりが育たない。女子について，母親と父親が共に統制が弱い場合（母父非統制型），自己抑制が発達する。また母親の統制が強く父親の統制が弱い場合（母統制型），強い攻撃性が形成される可能性がある。

このように，両親共に厳しい場合は特別な影響がみえないが，母親だけが厳しい（母統制型）場合は，男女共に高い攻撃性が形成される可能性がある。この場合，父親だけが厳しいときにはそのような影響がないという点から，母親と父親の役割，母－父－子の三者関係のありようや子どもによる認識が問題となる。また，両親共に統制がゆるやかな場合，女子の自己抑制を発達させる反面，男子の自己主張の発達を阻害する可能性がある。男子の場合はある程度の壁とか抵抗に出会ってはじめて自己主張の芽が形成されるのかも知れない。このような問題は今後の研究課題となる。

態度の矛盾については男子にのみ影響していた。両親ともに矛盾の少ない場合，男子は自己抑制や自己主張が高く，攻撃性が低かった。したがって，両親共に矛盾の少ない一貫した養育態度が，特に男子の自己制御の発達に望ましい影響を与えるようだ。

両親のどちらが実権を握っているかについて，両親ともに実権をもっている場合（両親実権型）は，男子の自己抑制も自己主張もさらには思いやりも発達しない可能性があった。それに対して，母親より父親の方が実権を持っている場合（父親実権型），男子は自己主張と思いやりがともに育つようだ。女子の場合，父親より母親の方が実権を持っている場合（母親実権型），自己主張が育つのに対して，母親より父親の方が実権を持っている場合（父親実権型）は思いやりが特に育たない可能性がある。

自己主張に関して，男子の場合は父親が実権を握っている場合に，女子の場合は母親が実権を握っている場合に育つと考えられる。ここでは，同性の親へのモデリングが生じている可能性がある。それに対して，両親がともに実権を持っていると認知している状況では，子どものしつけをめぐって葛藤が多く，それが男子の自己制御や思いやりの発達に悪い影響を与えているいるのではないか。また，母親よりも父親の方が実権を握っている場合，男子では思いやりが育つのに対して，女子では特に思いやりが育たない点が注目される。このように，男女によって母親父親の態度パターンから受ける影響がなぜ異なるのか，難しい課題が残る。

(5)　今後の課題

今後，検討されなければならない課題がいくつか残されている。

(1)　母と子，父と子という二者関係だけではなく，母と父と子という三者関係を問題にすることは子どものパーソナリティ発達の理解にとってきわめて重要である。本研究ではその三者関係の一端を課題としてきたが，分析が十分だというわけではない。三者のダイナミックな関係の分析にまで至っていない。このようなダイナミックな関係を，どのようにアプローチし，どのようなメジャーや指標を用いて，どのように分析するかという課題が残されている。

(2) これまでの研究で，親子関係が子どもの年齢や性によって異なった影響を与える可能性を示唆してきた。しかし，その分析は充分とはいえない。

(3) これまでは横断的なデータを扱ってきたが，同じ子どもが年齢の上昇とともにどのように変化（発達）していくかなど縦断的研究が必要である。

(4) さらに，自己制御を測定するメジャーの問題と並んで，園における子どもの特徴と家庭における子どもの特徴は異なる可能性のあることを示唆してきた（森下，2001)。子どもに関する評定や行動観察を通じて，園と家庭における子どもの行動特徴を明らかにすると共に，そのことがどのような要因に規定されるのかという課題を明らかにする必要がある。

(5) 本研究に付随する分析の過程で，自己抑制や自己主張の発達の様相が，各園によって異なっている可能性が示唆された。それにはどのような要因が関与しているのか。おそらく，園の先生の影響や園全体の教育方針，家庭のなかの人間関係の特徴などが反映されているだろう。さらに，園や家庭を取りまく地域社会の特徴など，生態学的な要因（Bronfennbrener，1979）が関係していると考えられる。課題はこのように大きな広がりを見せる。

（付記）本研究を進めるに当たり，和歌山中央幼稚園，じろうまる保育園，湯浅幼稚園，ぶっとく幼稚園，紀南幼稚園の園長先生をはじめ先生方，保護者の方のご協力を得ました。深く感謝いたします。なお，本研究は平成12年度厚生科学研究費補助金を受けました。

引用文献

Bronfenbrenner, U. 1979 The Ecology of Human Development — Experiment by Nature and Design （磯貝芳郎・福富　護　訳　1996　人間発達の生態学　川島書店）

小嶋秀夫　1988　幼児・児童における養護性発達に関する心理・生態学的研究　昭和62年度科学研究費補助金（一般研究Ｃ）研究成果報告書

小嶋秀夫・内山伊知郎・宮川充司　1988　家族関係調査（ＦＲＩ）手引き＜暫定版＞　名古屋大学教育学部教育心理学教室

森下正康　1985　幼児の攻撃行動・愛他行動のモデリング－教師モデルに関する受容的－拒否的態度の認知の影響－　心理学研究，**56**，138－143.

森下正康　1996　子どもの社会的行動の形成に関する研究　風間書房

森下正康　2000a　幼児期の自己制御機能の発達 (1) －思いやり，攻撃性，親子関係との関連－　和歌山大学教育学部紀要（教育科学），**50**，9－24.

森下正康　2000b　幼児期の自己制御機能の発達 (2) －親子関係と幼稚園での子どもの特徴－　和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要，**10**，117－128.

森下正康　2001　家庭と幼稚園での幼児の自己制御，思いやり，攻撃性の特徴　日本発達心理学会第12回大会発表論文集，140.

鈴木眞雄・松田　惺・永田忠夫・植村勝彦　1985　子どものパーソナリティ発達に影響をおよぼす養育態度・家庭環境・社会的ストレスに関する尺度構成　愛知教育大学研究報告，**34**，139－152.